東京大学大学院総合文化研究科　グローバル地域研究機構付属中東地域研究センター
［スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座］

UTCMES ニューズレター

VOL.12　2018

1．中東地域研究センター付属図書室「バフワーン中東研究文庫」開所とバフワーン氏の稷門賞受賞 ・・・・・・・1
2．講演会報告記 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
(1) UTCMES-KFCRIS シンポジウム
(2)「シリア・イラク情勢と移民・難民のいま」
(3)「東京大学中東地域研究センター広島出張公開講演会」
(4) Rogaia Mustafa Abusharaf, “Gender Justice and Religion in Sub-Saharan Africa: The Case of Female Genital Mutilation”
(5)「日本のメディア・企業で活躍するサウジ人アブドゥルアジーズ・アル＝フレイフさんによる講演会」
3．現地調査報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
(1) 天艸央子「ブルガリア民族舞踊に見るアイデンティティの多重構造と文化の政治性」
(2) 君島英恵「中世アレクサンドリアにおけるイタリア商人：ナポリ留学からの考察」
(3) 青木健「セミレチエのゾロアスター教・マニ教遺跡調査」
(4) 阿部尚史「オマーン＝日本学術交流とオマーンの文化と水資源利用」
4．書籍案内 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
三代川寛子 編著『東方キリスト教諸教会―研究案内と基礎データ』2017年、明石書店
5．スタッフ・発行者情報 ・・・・・・・・・・・・・・・12

1．中東地域研究センター付属図書室「バフワーン中東研究文庫」の開所とバフワーン氏の稷門賞受賞

去る10月10日、本郷キャンパスの伊藤国際学術研究センター・伊藤謝恩ホールにて、寄附・援助などにより、東京大学の活動の発展への貢献が著しい個人、法人、団体に贈られる稷門賞授賞式が執り行われ、本研究センター付属図書室の開室に多大な寄附をされたムハンマド・サウード・バフワーン氏にも、五神真本学総長より賞が贈られました。

バフワーン氏は本研究センターの図書室開室のためのみならず、がん免疫研究促進のために医学系研究科にも私財を寄附したことから、本学の理系・文系双方の学術研究の発展に大きく寄与したと評価され、この度の受賞に至りました。

稷門賞授賞式

同じく賞を受賞した3名とともに登壇したバフワーン氏は、受賞後のスピーチで、人類の発展に寄与するという、グローバルな観点に立脚しての学究活動の在り方の重要性を強調し、普遍的な見地に立った氏の学問観は、参列者の共感を得ました。

翌10月11日、駒場キャンパス9号館3階307号室のバフワーン文庫にて、「バフワーン文庫開所式」が執り行われました。

本学大学院総合文化研究科（教養学部）・石田淳研究科長（学部長）より花束を贈呈されたバフワーン氏は、前日の授賞式のスピーチと同じく、普遍的な観点に立脚して、当文庫が学術研究、殊に中東研究の発展に寄与すべく、学びたい人であれば誰にでも開かれている場として機能してほしいと述べ、誠実さに裏打ちされた氏の学問観に、開所式に立ち会った一同は深い感銘を受けました。

バフワーン文庫開所式

バフワーン氏のそのような真摯な思いを受けて開設に至ったバフワーン文庫は平成30年2月上旬より、試験運営を開始し、仮開室期間（閲覧・当日の一時貸出のみ）を約3か月ほど経たのち、5月中旬より貸出業務を含めた本格運用へと移行する予定です。

平成29年度中に蔵書は1000冊を数え、専門的な書籍だけでなく、中東研究に着手したばかりの若手の研究者が、自身の研究基礎力を養えるような基本文献・資料も重点的に蒐集する予定です。

バフワーン氏の述べた「学びたい人であれば誰にでも開かれている場」の構築をモットーに、文庫の整備を進めて参ります。

（文責：倉澤理）

2. 講演会報告記

(1) UTCMES-KFCRISシンポジウム『20世紀前半の日本における汎イスラーム主義の概念』

日　時：2017年9月6日（水）
　　16:00-18:30
場　所：東京大学駒場キャンパス
　　18号館コラボレーションルーム1
講演者：臼杵陽（日本女子大学）
　　小松久男（東京外国語大学）
　　Saud Al-Sarhan（KFCRIS）
　　Mohammed Al-Sudairi
　　（KFCRIS）

去る9月6日(水)、King Faisal Center for Research and Islamic Studies（KFCRIS）は東京大学駒場キャンパスにおいて東京大学中東地域研究センター（UTCMES）と共同で、『20世紀前半の日本における汎イスラーム主義の概念』（原題：The Idea of Pan-Islamism in Japan in the Early 20th Century）と題した歴史研究シンポジウムを開催した。

KFCRISはサウジアラビアの首都リヤドに拠点を置くファイサル国王財団（King Faisal Foundation）に所属するシンクタンクである。国の発展において知識を重んじた第三代国王ファイサル（在位：1964年－1975年）の遺志を継ぐことを目的として、故王の子息・息女らによって1983年に設立された。

今日、同国がアジア重視外交を強める中、KFCRISはアジア諸国、特に日本と中国との学術交流を積極的に推進しており、同研究所代表団によるUTCMES訪問もこれが二度目である。最初の訪問時の昨年2016年7月には、事務局長Saud Al-Sarhan以下三名が駒場キャンパスを訪れ、協力関係の模索を開始している

（UTCMESニューズレター Vol.9、20頁参照）。

また、今年初めには日本を代表するサウジアラビア研究者であるUTCMESの辻上奈美江准教授がKFCRISの客員研究員として約一ヶ月間リヤドに滞在され、また辻上准教授は初夏にも再び来サされて、KFCRISと笹川中東イスラム基金によるワークショップ "Saudi-Japanese Scholars Dialogue towards 2030"（リヤド、5月15日）においてスピーカーを務められるなど、二者間の協力関係は着実に進展している。

さて、UTCMESのご厚意で今回実現した本シンポジウムは辻上准教授の開会の辞で幕を開け、サウジアラビア・日本両側よりそれぞれ二名、計四名の研究者が登壇した。

最初の報告者は、日本中東学会元会長の臼杵陽教授（日本女子大学）、報告のタイトルは「**クルアーンの和訳：大川周明（1886年－1957年）**」（**原題：Translating al-Qur'an into Japanese: A Case of OKAWA Shumei (1886-1957)**）（※プログラムに掲載の仮タイトル "Japanese Pan-Asianist Shumei Okawa's Life and Works" より変更）。本報告では、大川周明の人生、著作、思想、そしてクルアーンの和訳の経緯などが、当時の政治情勢とともに詳しく紹介された。戦前・戦中期、大川はそのアジア主義者としての関心から、イスラームにかんする著作を数多く残し、戦後には東京裁判における審理の対象から外れた後にクルアーンの全文訳を完成させた。但し、大川がイスラームを東洋ではなく西洋の宗教として理解していたといった興味深い事実も指摘された。

これに続き、KFCRIS事務局長のDr. Saud Al-Sarhanが「**ヒジャーズにおけるアブデュルレシト・イブラヒム**」（**原題：Abd al-Rashid Ibrahim in Hejaz**）のタイトルで報告を行った。汎イスラーム主義者のタタール人で、晩年には東京モスクの初代イマームを務めたアブデュルレシト・イブラヒム（1857年－1944年）を題材とした本報告では、19世紀後半、当時オスマン帝国の影響下にあったヒジャーズに滞在していた若き日のイブラヒムがいかにして政治活動家になったのかが紐解かれた。特にQadri Bey、Ahmad Effendi、Ali Musaといった彼の思想に影響を与えた人物たちの群像と、オスマン帝国が巡礼を利用してロシア帝国内のムスリム共同体に反帝国主義武装蜂起を促していた当時の状況が克明に描き出された。

そして休憩を挟んだ後、東京大学名誉教授である小松久男教授（東京外国語大学）が、「**アブデュルレシト・イブラヒムと帝国：オスマン帝国、ロシア帝国、日本帝国**」（**原題：Abd al-Rashid Ibrahim and Empires: The Ottoman, Russian, and Japanese**）の題でイブラヒムについて検討を続けた。本報告では、1905年以降のイブラヒムの旅路とその思想と活動が議論された。アジア諸国を歴訪したイブラヒムが、新興国日本にムスリムたちをヨーロッパ帝国主義の軛から解放する役割を期待していたことが紹介された。また、日本で活動するイブラヒムが、ハディースの一節「中国にさえ知識を求めよ」（اطلبوا العلم ولو في الصين）に「中国の近くにも」（وبقرب الصين）と付言した、といった逸話も披露された。

最後の報告はKFCRISアジア学ユニット長のMr. Mohammed Al-Sudairiが務めた。彼の「**東洋のカリフとしての帝（みかど）：世紀転換期のアラブ人の書物における日本と中国人ムスリム**」（**原題：The *Mikado* as an Oriental *Khalifa*: A Cursory Look at Arab Writings on Japan**

and Chinese Muslims at the Turn of the Century）と銘打ったプレゼンテーションでは、Abd al-Rahman Al-Kawakibi、Shakib Arslan、Ali Al-Jirgawi、Rashid Ridaといった19世紀末・20世紀初頭に活躍したアラブ人思想家たちが東アジアをどのように見ていたのかが紹介された。東洋にイスラーム帝国を建設することを思案した当時のアラブ人思想家たちの日本に対する視座の中に、中国人ムスリムの存在が媒介として強く作用していたことが明らかにされた。

閉会の辞は私山田が務め、「道の前に良き同伴者を」（الرفيق قبل الطريق）というアラビア語の成句通り、UTCMESがKFCRISにとって、その年々深化するサ日学術交流における重要なパートナーであることを確認した。なお、シンポジウムには20名強の参加者があり、講演終了後にも参加者の間で歓談会が行われ、中東研究、イスラーム研究をはじめ、昨今の中東情勢や大学機関における研究のあり方などにかんしても議論が続いたこの場を借りて、本シンポジウムの実現にご尽力頂いたUTCMESの皆様に、改めて心より御礼申し上げます。

文責：山田真樹夫（KFCRIS研究員）

（2）特別講演会

「シリア・イラク情勢と移民・難民のいま」

日　時：2017年9月20日（水）
　　17:00-19:00
場　所：タワー111、第二会議室
　　（富山市牛島新町5-5）

シリアおよびイラクでは、2011年の「アラブの春」の後、政権の不安定化とともに過激派組織の活動が活発になり、多くの市民が犠牲になった。また国内外へ避難することを余儀なくされた人びとは数百万人規模とされている。

本センター（UTCMES）は、これまで、大学の拠点でもある東京を中心に活動してきたが、今後は地域をより広げて活動をすることで、いっそう中東地域の理解促進に貢献したいと考え、第一回目の試みとして富山市（タワー111）で「シリア・イラク情勢と移民・難民のいま」と題するシンポジウムを、科研基盤（B）「中東地域を中心とするイスラーム圏の宗教・民族・社会的多様性に関する総合的研究」（研究代表者・高橋英海）と共催して、開催することとした。講演者と講演題目は以下のとおりである。

髙岡豊（中東調査会・上席研究員）
「紛争下のシリア人、イラク人の越境移動の経験と意識」

山口昭彦（聖心女子大学・教授）
「イラクのクルド人問題と中東の将来：湾岸戦争から現代まで」

高橋英海（東京大学大学院総合文化研究科・教授）
「シリア・イラクのキリスト教徒の移動の歴史」

辻上奈美江（東京大学中東地域研究センター・特任准教授）
「難民女性による演劇を通じた癒し」

それぞれの報告について、ごく簡単に紹介したい。

髙岡氏の報告「紛争下のシリア人、イラク人の越境移動の経験と意識」は、2015年以降に欧州に大量に流入した移民／難民にかんして、まず、移民／難民の定義の曖昧さを紹介したうえで、実際にイラクやシリアから移民として欧州を目指した人々の実像を現地調査や世論調査をもとに明らかにした。氏の調査によれば、欧州に難民としてやってきた人々が「あてどなくさまようみじめな人々」というイメージで語られるのは現実と乖離しており、実際の「難民」は、スマートフォン端末を巧みに操り、最も危険が少なく、かつ自身にとって有利な条件が獲得できる移動先を選択しているという。移動の成功率は約99パーセントであり、また既に親族等が居住している土地に難民として入国している。つまり、こうした人々は、ブローカーへの数千ドル以上の支払い能力があり、またそういう「つて」が欧州にある、難民のなかでも非常に恵まれた人々であるという。それに対して、深刻なのは、周辺国（トルコ、ヨルダン、レバノン）に流入した難民であり、非常に劣悪な環境にあるという。また彼らは、現在は一時的な難民として手助けの代償となっているが、長期に居住することになると大きな軋轢が生まれる可能性が観察されているという（就労や結婚における現地人との競合）。

山口氏の報告「イラクのクルド人問題と中東の将来：湾岸戦争から現代まで」は、講演会翌週の月曜日（2017年9月25日）に控えたイラクのクルド人自治区における独立をめぐる住民投票の背景となる歴史的経緯を考察するものであった。氏は、イラクのクルド人の独立をめぐる動きを、第一次世界大戦後の中東秩序形成から説き起こし、ムスタファー・バルザーニーとイラク中央政府との「駆け引きの歴史」が説明された。バルザーニーらクルド人勢力は、1974年に中央政府の合意のもとにクルド人居住地域の「一部に」自治区をつくることに成功した（つまり、クルド人側が主張する地域をすべて自治区とできたわけでなく有数の油田地帯であるキルクークは中央政府の管轄下に残った）。しかし、それ以降も紆余曲折の連続だった（イランからの支援の打ち切り、イラン＝イラク戦争中のハラブジャの悲劇、湾岸戦争に際してのフセイン政権との対立など）。クルド人自治区を取り巻く環境が大きく変化したのは、2003年のアメリカによるイラク侵攻とその結果のフセイン政権崩壊であった。これ以後、イラク新政府は決定的に弱体化し、クルド自治政府を力によって屈服させることができなくなり、一方で、クルド人自治区は安定した統治と海外からの支援等で非常に高い経済成長を実現した。こうした状況で、独立の是非を問う住民投票が行われるのは、クルド人側が駆け引きの材料として、またクルド人自治政府のマスウード・バルザーニー

（ムスタファーの息子）の権力基盤強化のために提案されている側面があるという。ただし、イラク中央政府はもちろんのこと、イスラエルを除いてほぼすべての周辺国、およびアメリカが反対する中での住民投票は非常に大きな危険をはらんでいることが指摘された。

高橋の報告「シリア・イラクのキリスト教徒の移動の歴史」では、現在はムスリムが圧倒的多数を構成している中東において、イスラーム勃興以前はキリスト教徒が人口の主要な部分を構成し、イスラーム勢力による征服以降もキリスト教徒が存在し続けてきたことが述べられた。そのうえで、とくにシリア正教会の移動の歴史が説明された。第一次世界大戦末期におけるオスマン帝国領内のアルメニア人大虐殺に際して、トルコ東部にあたる地域の8割以上のキリスト教徒が姿を消したという（そのうち半数は殺害され、残る半数は他地域に移住）。イラクにおけるキリスト教徒に対する圧迫や迫害が始まったのは、2003年のイラク戦争以降であり、それは2011年のアラブの春以降強まり、「イスラーム国」の台頭以後、これまでにない厳しい環境に置かれたのである。

辻上の報告「難民女性による演劇を通じた癒し」は、「受け身の犠牲者集団」という難民理解を疑い、難民女性らの演劇セラピーという表現を通じた癒しの効果を取り上げた。題材は、『シリアの女王たち』Queens of Syriaと題するドキュメンタリー映像を手掛かりに、ヨルダン首都アンマンにいた難民女性たちが、出演する不利益（反体制派とみなされかねない）を感じつつも、演劇の練習を通じて、自分たちの境遇を話し合い、自己を表現していく様子から、彼女たちの自己回復を論じた。

当日富山市が雨に見舞われたこともあり、参加者は主催者の想定よりも少なかったが、岐阜からの参加者もあり（片道3時間とのこと！）、東京を離れて講演を行う意義について、少なからず手ごたえを感じた。一方で、より多くの方に講演会に足を運んでもらうための宣伝方法には検討の余地があり、今後も試行錯誤を続けていきたいと考えている。　（文責：阿部尚史）

（3）特別講演会

「東京大学中東地域研究センター広島出張公開講演会」

日　時：2017年10月28日（土）
　　13:30-15:30
場　所：広島市安東公民館
　　（広島市安佐南区2-16-2）

本センター（UTCMES）の、東京以外での学術成果公開活動の第二回目の試みとして、広島オマーン友好協会および広島市文化財団と共催して、広島市安東公民館にて出張講演会を開催した。講演者と講演題目は以下のとおりである。

森元誠二（東京大学中東地域研究センター・客員教授）

「オマーンをめぐる最近の情勢」

杉田英明（東京大学大学院総合文化研究科・教授）

「駱駝と日本人」

在オマーン日本大使を務めた森元氏は、近年のオマーンにおける政治・経済・外交面からの変化を解説した。具体的には、王位継承期に入った内政、石油価格下落に伴う財政・金融問題、そして増大する中国の影響力について現在のオマーンのおかれた状況を論じた。オマーン国王カーブースは数年来健康状態に懸念があるとして、毎年一定期間ドイツにおいて長期療養を行っていることが知られている。そこで注目を集めているのは、王位継承問題である。カーブース国王には直系子息がなく、皇太子がおかれていないため、彼の甥三人が後継者候補と目されてきたが、だれが次期国王になるかは不明である。これまでのオマーンの歴史では王位継承に際して政治的な混乱が発生しているため、カーブース国王後のオマーンの状況は予断を許さないという。また、「アラブの春」以降の民主主義的統治に対する国民意識の変化が、絶大なカリスマと国民の支持をもつカーブース国王後の状況を見通せなくしている一因でもあるという。

経済的な側面でもオマーンの状況は厳しい。石油輸出に依存するオマーン経済・財政は、石油価格の下落に伴って、膨大な海外からの借款に依存することになった。オマーンのソブリン債の格下げもなされ、外貨準備高も大きく減少し、経済成長の鈍化が著しい。これに対して、石油などの資源輸出中心経済からの転換や国内向けの各種補助金削減、公務員手当の縮小、法人税増税や付加価値税導入などが検討されているが、今のところ窮状を打開するには至っていないという。

こうした状況下に、オマーンに対して中国の経済的な進出が著しい。中国はオマーン産石油の70％を引き受けているほか、アジア・インフラ投資銀行（AIIB）を通じて、インド洋に面したドゥクム港の整備が行われている。さらにオマーンの対外債務（約100億ドル）のうち中国からの借款は18％を占め、現在も追加借款を協議中とのことであった。中東において中立的な存在として小国ながら独自性を発揮していたオマーンが内憂外患を抱えていることが明らかにされ、今後の動向に目が離せない。こうした点からも貴重な講演であった。

アラブ・ペルシア文学および比較文学を専門とする杉田氏は、日本人と駱駝の付き合いについて、古代から現代にいたるまで、文献資料だけでなく、物質資料、古典落語や歌謡曲、現代のポスターやテレビ広告にいたるまで網羅的に論じるものであった。

まず駱駝が紀元前3000年ごろにアラビア半島南部で家畜化され、それが北アフリカ、南アジア、内陸アジアに広まったこと、ヒトコブラクダ（中東アフリカ）とフタコブラクダ（バクトリア／中央アジア）で来歴が異なることが指摘された。

古く中国の書籍には「橐駝」（たくだ）と記され、金製駱駝（前2－1世紀）がトル

ファンから出土している。魏晋南北朝以降、駱駝の生態に関する知識が知られるようになり、また、その姿を成功にかたどった唐三彩の人形などが知られる。

日本と駱駝の関係では、古く日本書紀では、朝鮮半島から日本に駱駝がもたらされたとする記事がある。また絵、彫刻、文物が日本に数多く入ってきていた。例としては、東大寺正倉院御物に「螺鈿紫檀五弦琵琶」にフタコブラクダの細工がみられる。文献上の記事としては、中国に渡った京都大雲寺の僧成尋による駱駝に関する記事が『参天台五臺山記』に見られるほか、図像表現も涅槃図や南蛮屏風（狩野内膳）に見られた。

徳川時代には、蘭学との関係で詳しい模写がもたらされ、またオランダを通じて実際に駱駝がもたらされた。とくに1729年につれてこられた駱駝のつがいは、日本各地に巡業し、日本人の駱駝理解が進んだ。夫婦仲が良いこと、また大きい割に品質が劣り訳立たぬものの比喩となったこと、また「駱駝」という音と「楽だ」という音が掛詞とされたことの３点が駱駝から連想されることになった。

近代明治以降になると駱駝は中東との関係が強調される。当時の中東は西欧列強の圧迫をうけていたこと、また沙漠地帯が不毛であるという理解で、駱駝は「亡国の動物」として否定的に認識されるようになった。そのほか文学作品などにも取り上げられるが、概して悲哀に満ちた存在として描かれている。

それが大きく変わるきっかけは歌謡曲「月の沙漠」（1932年レコード化）である。歌詞の内容は現実的なものではないが、日本人のシルクロード認識に大きな影響を与え、その中で駱駝が肯定的に理解されることになる。戦後になるとシルクロードへの興味は一層高まり、駱駝もそれに伴って頻出する。また「駱駝＝楽だ」という連想も再び脚光を浴び、鉄道のマナー・ポスターや宣伝広告などにも多数利用されるようになる。以上のように、杉田氏は、日本人の駱駝理解が時代によって大きく変化してきたことを多方向から詳細に分析し、画像、音声、動画も活用して大変充実した講演であった。

雨にもかかわらず会場にはたくさんの聴衆が参加してくださった。講演会開催にご尽力くださった、安東公民館の宮原館長をはじめとした館員の皆さんと、広島オマーン協会の皆さんに心からお礼を申し上げたい。　（文責：阿部尚史）

（4）特別講演会

Gender Justice and Religion in Sub-Saharan Africa: The Case of Female Genital Mutilation

日　時：2017年11月5日（水）
14:55–16:40
場　所：東京大学駒場キャンパス
１号館158教室
講演者：Rogaia Mustafa Abusharaf
（Georgetown University in Qatar）

2017年11月5日、ジョージタウン大学カタル校で教鞭をとっておられるロガイア・アブーシャラフ氏を招き、"Gender Justice and Religion in Sub-Saharan Africa" と題する講演会を開催した。アブーシャラフ氏は、女性に対する抑圧の一つの象徴ともいえる「女性器切断」（Female Genital Mutilation）／女子割礼をめぐる諸問題について、とくにサハラ以南アフリカにおける事例を詳しく論じた。

最初に女性器切断／女子割礼とは何かを、さまざまな施術形態をもとに説明し、非常に広い地域でこの施術が行われていることを、統計にもとづき紹介した。そして問題となるのは、男子割礼との比較である。男子割礼は、セム的一神教で重要な預言者であるアブラハムが割礼をしていたことが啓典に記されているため、宗教的な義務として動かしがたいという。それに対して女子割礼／女性器切断は啓典等における言及はなく、すなわち宗教的義務ではないといえるのである。このことが、女子割礼／女性器切断を放棄する重要な事由

となる。アブーシャラフ氏はセネガルにおける事例を紹介し、宗教指導者であるイマーム・ディワーラが女子割礼／女性器切断の廃絶に向けた運動を行っており、外国からの干渉を排除しながらも、現地の草の根からの動きで、一定の成果を得ていることを明らかにした。女子割礼／女性器切断をやめるためには、男性側にも協力者が必要とされるのである。

質疑においては、インドのサティーや中国の纏足のような類似の現象との比較の問題や、セネガル以外の他地域での取り組みなどについても議論された。

（5）特別講演会

「日本のメディア・企業で活躍するサウジ人アブドゥルアジーズ・アル＝フレイフさんによる講演会」

日　時：2017年12月18日（水）
14:55–16:40
場　所：東京大学駒場キャンパス
１号館158教室
講演者：アブドゥルアジーズ・アル＝フレイフ

現代のグローバル時代を、中東の人々はどのように現実を受け止め、どのような考えを持ち、どのような将来を見据えて生きているのか一日頃ニュースで見聞きする遠い国の他者の物語としてではなく、同じ時代を共に生きる若い世代から等身大の話を聞く機会として、日本文化を中東に発信するコンサルティング会社で働くアブドゥルアジーズ・アル＝フレイフさんをお招きし、お話を伺うとともに、本学学生と交流を持っていただいた。

流暢な日本語で自己紹介をしたフレイフさんは、日本文化への興味から大学の日本語学科に進学した経緯を語り、その話しぶりからは、単なる功利的な目的からのス

キルの習得ではなく、より深いレベルから日本文化の理解を志し、努力をされてきた形跡が見受けられた。

講演会の後の交流会では、このようなフレイフさんの姿勢に感化され、学生たちから質問が相次いだ。普段の交流ではなかなか聞きづらい政治的・文化的な事柄に関する質問に対しても、真摯な態度で自分の意見を述べるフレイフさんに、学生たちは同じ時代を生き、同じような悩みを抱える同じ若い世代として人間的な親しみを抱くとともに、ともすればメディアなどにより画一的なイメージで語られがちな「サウジアラビア」という国に実際に生きている人々の多様性をより具体的に見て取ることができたはずである。　（執筆：倉澤理）

3. 現地調査報告

（1）「ブルガリア民族舞踊に見るアイデンティティの多重構造と文化の政治性」

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学科比較社会文化学専攻博士前期課程
天艸央子

多様な民族が混住してきたバルカン半島は、15世紀以来、オスマン帝国の「本土」として栄えたものの、19世紀になるとナショナリズムの嵐が吹き荒れる。バルカンの民族たちはオスマン帝国から独立を果たし、自民族の存在をより強固なものにするため、「国民国家」の樹立を果たす。しかし、この地域の抱える歴史的経験の複雑さのために、ごく最近の時代まで民族紛争が勃発していたことは記憶に新しい。そのバルカン半島に位置するブルガリアは、国民統合という点では比較的安定しているかにみえるが、実態はどうなのだろうか。民族とは、国民とは誰なのか。民族の文化とは、国民の文化とは誰の文化なのか。

ブルガリア・ショプ地方の踊りの特徴である「ナトリサーネ」。これは地面を足でいじめるように鋭く踏みつけるステップである。ショプ地方の大地は岩がちで作物が育ちにくい不毛な土地であるため、こうしたステップは大地への怒りを込めているのだという。

ブルガリアの古都ヴェリコ・タルノヴォ

「あなたのステップはとても正確。でも、年頃の娘が踊るにはあまりにも鋭すぎるわ。」

ショプ地方ディヴォティノ村の踊りを通し終えて、Kさんが筆者にこのように言った。Kさんは続いて、以下のように説明した。

「昔、村では若い娘たちが集まって踊っている時、年頃の息子を持つ母親がその様子を見ながら、嫁にしたい娘を品定めしていたの。そこではふつう、気立てのよさそうな、女性らしい踊りをする子が、（義理の）娘にするのに好まれたのよ。」

筆者は2017年7月の1週間、ブルガリアの首都ソフィア近郊のバンキャという町で、フィリップ・クテフ国立舞踊団の元ダンサー、コレオグラファーのH.Iさんと、その妻で国立のコレグラフ専門学校で教鞭をとっていたK.Iさんの下、ブルガリア民族舞踊のセミナーに参加した。二人とも社会主義期に活躍していた、ブルガリア民族舞踊の指導者である。フィリップ・クテフ国立舞踊団を始め、社会主義期には政府の支援下で「歌と踊りのための」民族音楽アンサンブルが創設された。そこでは、西洋の美的価値観を取り入れた世界的な舞台芸術を創り出すという目的の下、ブルガリアの村々で踊られてきた伝統的な踊りを元に舞台化された、新たな民族舞踊が生み出されてきた。それは村の踊りよりも規格統一され、洗練されているという印象を観客に与えた。その一方で、それらの踊りは村における調査と、伝統や慣習への深い理解の上で創られていた。しかし社会主義期に推進された都市化、そして1990年の民主化以来急激に進行し、2007年のEU加盟などによって現在もなお加速し続けているグローバリゼーションの中で、「村の文化」も当然に変化してきた。

I夫妻は一貫して、「本物の踊り」とは村の踊りのことであり、民族舞踊を踊る上でそれが本来置かれていた脈絡を理解することは欠かせない、ということを強調していた。しかし、現在舞踊団で踊るダンサーの大半は、I夫妻が「本物」だという村の踊りを知らない。「若いダンサーたちは、ステップの技術的な高さを追求して踊っている。今は生活が変わってしまったし、村で踊りがどのように踊られていたのかを知らないのは仕方のないことだけれど、それを理解した上で表現できる人が多くないのは残念に思う」とKさんは筆者に話した。二人は、生活環境の変化と担い手であるダンサーの年齢層の変化によって踊られ方が変わっていくことには理解を示していた。しかし筆者との対話の中には、変化した踊り方に対する「本物ではない」という意識も感じられた。

筆者はセミナーに参加した次の週、ピリン国立舞踊団の現役ダンサーBさんの話を聞くため、ブルガリア南西部の都市ブラゴエフグラッドに出かけた。Bさんはこの都市で生まれて地元の子ども舞踊団で踊り始め、首都ソフィアにある舞踊学校で教育を受けた後、ピリン国立舞踊団に入団した。Bさんが筆者に対して説明してくれたことは、以下の通りであった。舞踊団で踊るダンサーの中には、「古い踊り」を指向す

る人もいる。それは舞台上での踊りを、本来村で踊られていた踊りにできる限り近づけようとする方向性である。(「古い踊り」とはI夫妻の言っていた「本物の踊り」のことだと確認をとった。) Bさん自身は、ダンサーとしてはそういった方向性の人たちを尊敬しているが、現代に生まれた自分は村の本来の生活を知りえない。ゆえに自分は「舞台芸術」として、民族舞踊の魅力を伝えることに関心があるのだと話した。

I夫妻とBさんの話からは、両者が国立舞踊団のダンサー、関係者という立場を経験していながらも、「自分とは異なる方向性をもつ者」の存在を民族舞踊団の内部に規定していることが感じ取れる。この他者化のプロセスには、民族舞踊の一側面である「伝統的な村の生活」にアクセスすることができた世代と、そうでない世代との差異がかかわっていると考えられる。

次に2016年8月の、ブルガリア中央部の都市ヴェリコ・タルノヴォでの筆者の体験について記述したい。筆者はヴェリコ・タルノヴォ大学の夏期語学文化セミナーに参加していた。そこで、民族舞踊のクラスを指導していたPさんから、コンサートで踊りを披露するよう勧められた。Pさんは、ヴェリコ・タルノヴォの町で踊りの名人として知られている人物であり、現在は地元の子ども舞踊団の指導をしている。国立の舞踊団でダンサーをした経験はなく、I夫妻、Bさんを「ナショナルなダンサー」とすると、Pさんは「ローカルなダンサー」として位置づけることができる。筆者が披露する踊りの候補に挙げたのは、中央東部トラキア地方の踊り、東部黒海沿岸ヴァルナ地方の踊り、そしてマケドニア共和国との国境付近、南西部ピリン地方の踊りであった。実際に踊って見せると、Pさんはピリン地方の踊りについて「これはマケドニアの踊りだ」と言って、他の2曲だけをコンサートで踊るよう筆者に伝えた。しかしそのピリン地方の踊りは、ピリン国立舞踊団のダンサーから筆者が習ったものだったのである。筆者がそのことを伝えてもPさんは意見を変えず、やはりコンサートで踊るのは好ましくないようであった。このことについては、いくつかの理由が考えられる。

Bさんの指導するダンスグループ

まず、ブルガリアにとっての「マケドニア」が二つの意味を有していることに注意しなければならない。現在旧ユーゴスラヴィア・マケドニア共和国が位置している地帯は、その歴史的経験の複雑さから、「マケドニア問題」と呼ばれる領土問題を抱えてきた。「歴史的マケドニア」はバルカン戦争以後、セルビア、ブルガリア、ギリシャの3国に分割され、それぞれ「ヴァルダル・マケドニア」「ピリン・マケドニア」「エーゲ・マケドニア」と呼ばれた。ブルガリアは、オスマン帝国からの独立を目指して始まった民族復興運動の時代以来、この領土問題に関与してきた。その後一時的に「マケドニア民族」の存在を承認した期間はあったものの、ブルガリアは言語的類似性を主な根拠に「マケドニア人は民族的にブルガリア人と同一である」としてその存在を認めない方針をとってきた。1990年代にマケドニア共和国が独立を宣言すると、バルカン情勢のかけ引きの中でブルガリアはいち早くマケドニア共和国の独立を承認したが、依然としてマケドニア民族の存在は否定している。このように歴史的に連続してきた文化領域を、政治的に引かれた国境線で分断することはできない。ピリン国立舞踊団の衣装はマケドニア共和国に位置する村々の衣装をモチーフにしていることはよく指摘されているし、マケドニアのタネツ国立舞踊団とブルガリアのピリン国立舞踊団ではほとんど同じ歌が、各々の国の言葉で歌われている。また、ブルガリアでは南西部の歴史的マケドニアの領域を「ピリン地方」もしくは「マケドニア地方」と呼ぶ。以上のことから、ブルガリアにおいて「マケドニア」という言葉は「旧ユーゴスラヴィア・マケドニア共和国」と「マケドニア地方」の二つの意味を有しているということができる。

Pさんの発した「マケドニア」がどちらの意味であったかは確認することができなかったが、ここではその踊りだけが却下されたという事実に着目したい。ヴェリコ・タルノヴォで生まれ育ったPさんにとっての「ブルガリアの踊り」と、ピリン国立舞踊団のレパートリーとして踊られる「ブルガリアの踊り」の間には何かしらの隔たりがあると推測できる。前述のとおり、Pさんの生まれ育ったヴェリコ・タルノヴォはブルガリア中央部に位置しており、他に挙げた候補曲のトラキア地方、ヴァルナ地方と比較するとマケドニア地方とは地理的に距離がある。この点で、Pさんが自身の帰属する「文化」に判断を下した時、自己を中心として広がる空間の地理的距離感が、心理的距離感に少なからず影響を与えた可能性がある。それゆえにPさんは「ふさわしくない」と判断したのだと筆者は考えた。このことは、国立民族舞踊団では「ブルガリアの民族舞踊」として表象されている踊りが、ブルガリア人であると同時にローカルな存在でもある個人にとっては、「自分の踊りではない」として他者化された出来事だと見ることができるだろう。

ブルガリア料理　スネジャンカ

ブルガリア民族舞踊は社会主義期に、世界的に評価される舞台芸術となることを目指して創り出された。それは、ブルガリア国民としての「ナショナルな」意識を視覚化し定着させる機能を担っていた。しかしPさんの発言からは、そのプロセスにおいて統合されてきた「ナショナルな」ブルガリア人アイデンティティは、「ローカルな」個人のアイデンティティとは必ずしも一致しないこと、すなわち帰属意識の多層的構造を垣間見ることができた。また、ブルガリア人意識を統合する目的で創設された民族舞踊団の内部でも、「あるべき姿」として了解される踊り方が一致しないことが、I夫妻とBさんへのインタビューからうかがえた。それは世代による経験や環境の差異が主な原因であった。

文化の中心としての「自己」を規定する

要素は無数に存在している。2回にわたるフィールドワークの中で、このことを強く実感させられた。それと同時に、「国民／民族」という概念を検討すること、アイデンティティの多重構造を、文化資源を通して論じることへの関心が、より一層深まった。加えて、文化が内包する他者化のプロセスという政治性について思い至ることができた、有意義な経験となった。

(2) 中世アレクサンドリアにおけるイタリア商人：ナポリ留学からの考察

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻博士前期課程
君島英恵

La attività dei mercanti nel Mediterraneo

中世を通して地中海世界は、様々な文化が交差する空間であった。アジア、ヨーロッパ、イスラム世界から運ばれた様々な商品と共に、各々の文化も移動し、時に反発し時に融合した。その移動の担い手として、商人たちの活躍は大きなものであった。特にイタリア商人は地中海における貿易の覇権を握っていたと言える存在である。中世後期、イタリア商人は積極的にイスラム世界へと進出し、大きな市場を持つ港に自分たちのコミュニティを形成していた。エジプトの港町、アレクサンドリアは特に大きな市場であり、13世紀以降多くの外来商人が進出した。トルコ人、ムーア人、スペイン人、イタリア人、カタロニア人、エチオピア人、タタール人、ユダヤ人、ペルシャ人など、あらゆる地域の商人であふれていた商業都市であったが、残念ながら現在は中世の面影を見ることはほとんどできない。しかし外来商人が残した記録は、当時のアレクサンドリアの姿を探る大きな手掛かりとなる。当時は現在と比べ宗教および文化の壁がより高く存在し、海を越え異なる文化圏に入るということが常に大きな危険と隣り合わせであったと考えられる。そのような時代において、異文化の中で生きる術に私は強く関心を抱いた。現在、中世後期、特にマムルーク朝時代のアレクサンドリアにおける、イタリア商人の活動および生活について研究を行っている。その中で、2017年10月から2018年2月にかけて、ナポリ東洋大学オリエンターレへ留学する機会に恵まれた。

La vita a Napoli

『女神パルテノペの足元に広がる土地』と例えられるナポリは、古代ギリシャ人によって建設された植民都市に起源をもち、中世にはナポリ王国の首都となり、南イタリアの政治・経済の中心となった。女神パルテノペは海の精霊セイレーンを指す。美しい歌声で船乗りを惑わし、遭難や難破に合わせる怪物という、魅力と危うさを持ち合わせるイメージと重なり、ナポリという都市は壮大な歴史と世界遺産にも登録されている美しい景観を擁する一方で、路地には聖と濁が混在する庶民の街でもあった。

オリエンターレは1732年に建設された、ヨーロッパにおける最古の東洋研究機関の一つである。その目的は宣教師たちに中国語を教え、清王朝領内でキリスト教の布教を促進することであった。現在ではアジア、アフリカ、ヨーロッパ等50を超える言語を学ぶことができる。オリエンターレでは、Storia Medievaleという授業を主軸として中世史の研究を進めた。授業は中世という括りの中で、イタリア史のみにこだわらず、イスラム世界、スペイン、北欧、アジアなど、少人数ながら様々な地域に関心を持つ学生が受講している。自分以外の学生は全員イタリア人学生であった。ましてやイタリア語も不十分な状態であったため、授業の内容もさっぱり分からず、はじめは非常に困難な状況であった。しかし教授は留学生である自分のことを気にかけてくれつつも、他の生徒と対等に扱い、常にイタリア人学生達が力となってくれたお陰もあり、無事中世史の発表を終えることができた。現在は学期末のレポートの作成に悪戦苦闘している。

自身の専門とは少々離れてしまうが、授業内ではナポリの経済史について発表を行った。せっかくナポリに留学しているということもあり、ナポリの歴史についてより深く学びたいと思ったためである。中世のナポリはフランスのアンジュー王家、スペインアラゴン王家の支配を受けており、経済史の分野ではアラゴン商人が活躍した。時代ごとに街が整備され、戦争や外交のために城や城壁が建設され、中世の面影は少しながらも現在に残っている。ナポリも中世において多くのイタリア都市と同じく、イスラム世界との貿易に従事していたにも関わらず、ヴェネツィア、ジェノヴァといった北イタリアの都市と比べ、その研究は未だ少ないように感じた。現在自分の学んでいる歴史の舞台、特に全く異なる文化を擁する街に今自分が生活しているという感覚は、留学ならではのものであると思った。

サン・マルティノ国立美術館から望むナポリの街

Castel Nuovo e Società Napolitana

ナポリにある様々な歴史的建造物の中でも、カステル・ヌオーヴォは特に印象深い。この建物はアンジュー公チャールズの命によって、1279年より要塞としての建設が始まった。その後アンジュー朝およびアラゴン朝のもとで様々な変化を遂げ、堂々たるその姿は、現在ナポリのシンボルの一つとなっている。御縁があり、カステル・ヌオーヴォの日本語版音声ガイドの制作の手伝いをすることになった。その中には、ソシエタ・ナポリターナと呼ばれる図書館兼史料館が存在する。ここでは19世紀より史料の収集が開始され、ナポリやヨーロッパに関する様々な史料を閲覧することができる。歴史を専攻する者にとっては宝箱のような場所である。私の研究との関係では、イタリアやアラゴン朝スペインとイスラム世界との協定の史料があり、閲覧することができた。他にも、ナポリにはヴィットーリオ・エマヌエーレⅡ世国立図書館や、美術館付属図書館など、いくつもの史料館が存在し、利用可能である。日本ではイタリア及びイスラム関係の原史料に触れることは難しいが、ナポリでは様々な史料を閲覧できる場所が多く存在している。また都市自体も非常に古いため、建築物や美術館、博物館の展示品等も一つの史料として研究対象になり得ると考えた。

Il Viaggio in Egitto

ナポリ留学中、2018年1月3日から8日にかけてエジプト調査の機会に恵まれた。カイロを拠点とし、アレクサンドリアにも訪れることができた。カイロから列車で3時間程揺られ、地中海に面する港町、アレクサンドリアへと辿り着く。内陸部のカイロとは少々雰囲気が異なり、開放的な商業都市という印象は中世のアレクサンドリアと重なるものであった。中世のアレクサンドリアは二重の城壁で囲まれており、東西南北に四つの門があり、ヨーロッパ商人は三日月型の港の東側から、海の門と呼ばれる北門を通り都市へと入る。13世紀頃より外来商人たちは、自分たちのコミュニティを形成し、フォンダコと呼ばれる商館を拠点として活動を行っていた。ヨーロッパ商人は、東方商品の獲得及びイスラム世界において安全かつ確実に活動できる環境を必要とし、他方マムルーク朝政府にとって外来商人および商品にかけられる関税は、大きな収入源であった。外来商人たちはマムルーク朝時代には、コミュニティ内において領事であるコンスルを中心としてマムルーク朝政府やスルタンと交渉を行い、常に政府の監視下に置かれつつも比較的自由に商売を行うことができた。

現在のアレクサンドリアにはマムルーク朝時代に建設されたカーイトバーイの要塞が残り、外洋を見渡すことができる。またこの都市には、ユネスコとエジプト政府が共同で創設した新アレクサンドリア図書館が存在する。古代において最高の学術機関であったアレクサンドリア図書館の復活を目指し、世界中の文献やエジプト、アラブ地域、地中海の情報を収集している。非常に近代的で巨大な図書館兼文化センターであり、中には写本博物館、考古学博物館も併設されている。

カイロではハーン・アルハリーリー（Khan el-Khalili）の市場が興味深く魅力的な場所であった。エキゾチックな狭い路地の中に所狭しと店が並び、エジプト産織物、香水、スパイス、水煙草、貴金属等、様々な商品が陳列されており、非常に活気のある場所であった。市場の規模は非常に大きく、路地の店と広場に面する露店商の、二つのエリアに分かれる。基本的に各々の店は専門店であり、客と店主との値切り交渉も買物の醍醐味である。商品は布製品と香水瓶・香水、アクセサリーの店が比較的多く見受けられた。イタリアは基本的に開けた広場に市場が存在するが、エジプトは迷路のような路地を進みながら商品を探すため、宝探しのような気分を味わうことができる。現在は非常に観光地化が進んだ場所であるが、イスラム世界の市場の雰囲気を感じることができた。

カイロ、ハーン・アルハリーリーの市場

日本とは全く異なる文化圏であるイタリア留学及びエジプトへの調査であったが、現地の人々は非常に暖かく私を迎えてくれた。自分の研究対象とする地域において勉強に励むことができるのは非常に恵まれた機会であり、多くの人の助けを受けながら、ナポリ東洋大学オリエンターレにおいて充実した日々を送ることができた。

(3) セミレチエのゾロアスター教・マニ教遺跡調査（2016年9月）

静岡文化芸術大学 教授
青木 健

天山山脈北麓に広がるイシク・クル湖からチュー川にかけての一帯は、嘗てはセミレチエと呼ばれ、シルクロード中の天山北路の要衝として名高かった。現在では、人口540万人のキルギス共和国の領土内にすっぽりと含まれている。筆者は2016年9月に、奈良県立橿原考古学研究所の調査隊に加えて頂き、キルギスを訪問する機会を得て、中世のセミレチエで栄えた都市国家遺跡にゾロアスター教やマニ教の遺構を探った。以下は、その際の簡単なレポートである。

9月初旬にキルギスの首都ビシュケクにあるマナス国際空港に到着したのだが、行き交う人々の顔立ちは黄色人種であるにも拘らず、道路の両端には整然とした白樺並木がどこまでも一直線に続き、トルコ系遊牧文化よりは濃厚にロシア文化の香りを感じた。その白樺の紅葉がはらはらと舞い落ちるさまを見ると、日本では残暑が厳しい気候なのに、キルギスはもうすっかり「天高く馬肥ゆる秋」である。翌日からは、セミレチエにある以下の3つの遺跡を順次巡った。

＊　＊　＊

最初に到着したのは、**バラサグン遺跡**。ここはシルクロードの天山北路の中継地点に当たるので、7～9世紀頃にソグド人の隊商都市が造営されたと考えられている。その後、突厥人やウイグル人といった遊牧民が王庭として幕舎を張ったことで、都市として発展したのだという。一般には、トルコ系遊牧王朝カラ・ハン朝（10世紀～1212年）やカラ・キタイ朝（1124年～1218年）の首都であろうと推定されている。これらの王朝は天山山脈北麓を王庭としたので、その可能性は充分に高いらしい。

1キロ×800メートル四方の崩れかけた城壁内には、突厥人が建てたと思われる無数の石人が林立しているが、何の用途に用いられたのかは全く不明だとのこと。墓か、倒した敵の象徴と推測されているそうである。ただ、周囲を万年雪の山また山に囲まれた要害堅固な草原（定住民的な発想では、甚だ語義矛盾を来しているような表現だが）で、満州の遼王朝の王子であった耶律大石（1087年～1143年）が、新興の金王朝に敗れた後、ここでグル・ハーンに即位して西遼＝カラ・キタイ朝を再興した故事を思うと、遊牧民がここを何かの宗教的な聖地として崇めていた可能性はあるだろう。

また、2部屋しかない附属博物館に入ってみると、オスアリや十字架墓が多数展示されていた。シルクロード華やかなりし頃には、ソグド人ゾロアスター教徒やネスト

アク・ベシムの伝・マニ教遺跡

リウス派キリスト教徒などが多数バラサグンに居住していたことが分かる。

＊　＊　＊

次に訪れたのは、**アク・ベシム遺跡**。6～9世紀にシルクロードの天山北路の中継地点として栄えた隊商都市で、唐代の文献には「砕葉城」または「素水城」（スィアーブ）として言及され、安西四鎮と大雲寺が置かれていた。当初は西突厥の首都として栄えたものの、10世紀以降にバラサグンに繁栄を奪われたらしい。

地理的には、バラサグン遺跡から北西へ6キロほどの地点にあり、両者の立地条件には殆ど変わりがない。城壁は750メートル×600メートルで、バラサグン遺跡より一回り小さい。時代的にはこちらが先行している所為か、碁盤目状の土地区画は全くなされておらず、上空写真で見ると、内城も外城も不規則な形状をしている。

持参した資料を基に歩き回ったところ、内城の南門前の好位置は、ネストリウス派キリスト教教会によって占められていた。しかも、城内には複数の教会があり、少なくとも放棄される直前の段階の砕葉城では、ゾロアスター教でも仏教でもなく、ネストリウス派キリスト教が政治権力によって最も優遇されていたことが見て取れた。

次に、内城と外城の間には、仏教僧院と推定される遺構が幾つか立ち並んでいた。普通、仏教僧院跡からは仏像が出土するので、火の灰しか出土しないゾロアスター教拝火神殿などよりは遥かに識別が容易である。9世紀頃の砕葉城で、ネストリウス派キリスト教に次いで優遇されていた宗教が仏教であることは動かないだろう。

更に、筆者の期待の星、中央アジア唯一のマニ教寺院跡と言われる地点に行ってみる。しかし、ソ連時代の発掘報告書には、これがマニ教寺院であるとの証拠は何一つ記されていない。しかも、「死体晒し台」などの記述があるので、私が読んだ限りでは、ゾロアスター教関連の葬送施設であるとの印象を受けざるを得なかった。立地条件も最悪で、地図の上では外城の西側に当たっている。しかも、当の地点に行ってみると、今やただの大根畑が広がっていた……　仕方がないので、ここで記念撮影したものの、どうみても「畑で大根を作る人」の写真にしかなっていない。

クラスナヤ・レーチカの伝・ゾロアスター教ネクロポリス

最後に、外城の東北側にあるゾロアスター教の納骨器の出土地点に赴く。この墓地がある以上、砕葉城に相当のゾロアスター教徒が在住していたことは確かである。ただ、納骨器は沢山出土しているものの、何故か骨自体は見付かっていないらしい。

＊　＊　＊

3つ目に訪れたのが、**クラスナヤ・レーチカ遺跡**。7～9世紀に栄えたと見られるセミレチエ地方最大の城塞都市遺跡である。地理的には、アク・ベシム遺跡から更に北西に40キロ進んだ地点にある。3つの独立した城塞遺跡を1つに連結したもので、規模の上ではバラサグンやアク・ベシムを遥かに凌ぐ。それにも拘らず、この遺跡の来歴は全く不明で、甚だしくは歴史上の名称さえ判明しておらず、単にロシア語で「赤い大根」と呼ばれている。多分、発掘された頃、この辺りは大根畑だったのだろう。

持参した発掘報告書でネクロポリスと名付けられたゾロアスター教徒墓地に辿り着くと、これはまた酷い保存状況である。禁止されているにも拘らず、周囲の住民が日干し煉瓦を焼く為に、此処の柔らかい土を掘ってしまうとかで、一面に頭蓋骨や大腿骨、納骨器の破片が散乱している。正に、漢詩に

衆骨朽ちて　泥と成り
此の山　土多く白し

とあるのを地で行っていた。或いは、杜甫が「兵車行」で詠った

君見ずや、青海のほとり
**　　古来白骨、人の収むる無く**
新鬼は煩冤し、旧鬼は哭す
**　　天陰り雨湿れば、声啾啾**

の「青海のほとり」を「赤大根の遺跡」にすれば、正にこの光景通りである。多分、この人骨の主たちは、7～9世紀に此処で亡くなったソグド人ゾロアスター教徒たちであろう。私は『アヴェスター』の葬祭文を唱え、もしかしてネストリウス派キリスト教徒も混じって居るといけないから、念には念を入れて十字を切っておいた。

この墓地を抜けると、発掘報告書に「ゾロアスター教の塔」と記載された遺跡に逢着した。無論、これがゾロアスター教の塔である証拠など何一つない。そもそも、ゾロアスター教の宗教構造物で尖塔型のものなど、私が知る限り存在しない。これは、仏教のストゥーパ遺跡ではなかろうかと、素人目にも疑わしく思えるほどであった。

以上が、セミレチエにあるバラサグン、アク・ベシム、クラスナヤ・レーチカの各遺跡におけるゾロアスター教・マニ教遺跡の現状である。

（4）オマーン＝日本学術交流とオマーンの文化と水資源利用

阿部尚史

2017年3月下旬、東京大学中東地域研究センターに所属する高橋英海、辻上奈美江と報告者は、オマーン国に出張し、スルタン・カーブース大学はじめとする関係機関を訪問した。以下この出張の報告を行う。

報告者は3月19日にオマーンの首都マスカト入った。3月にもかかわらず気温・湿度ともに日本の7・8月並みで、我々の感覚では「真夏」である。もっともオマーンの真夏は他の湾岸諸国と同様この程度ではなく、気温50度を超える日も珍しくない。

当初3月20日にオマーン高等教育省を訪問する予定であったが、残念ながら先方の都合がつかず、関係者との面会を断念した。午後には、中東地域研究センターに図書室を寄附してくださったオマーンの実業家ムハンマド・サウード・バフワーン氏と、氏の迎賓施設にて面会し、センターの兼務教員である高橋英海が当時開室準備中の図書室（ムハンマド・サウード・バフワーン中東研究文庫）の概要を説明し、今後の図書室の運用などについても意見交換を行った。3月21日には、スルタン・カーブース大学を訪問し、日本オマーン協会の大森理事長および林幹雄理事も同席し、アリー・サウード・ビーマーニー学長（イギリス式にvice chancellor）やアブドゥッラー・キンディー教養学部学部長（Dean,

College of Arts and Sciences）をはじめとする同大学執行部と面談することができた。ここでは、スルタン・カーブース大学の学術活動と東京大学との今後の協力関係について意見交換を行い、また学生交流の可能性についても話し合われた。また大学紹介の映像を視聴し、スルタン・カーブース大学が研究活動と学生の教育に熱心に取り組んでいることがうかがえた。

同日の午後にはオマーン国の国立文書館を訪問し、ハマド・ムハンマド・ダウヤーニー館長と面会することができた。同館は古文書の保存にとどまらず政府機関文書の保存・分類にも精力的にとりくんでいるとのことで、アーカイヴズ学に関する最新の学術成果を参照しながら最適な方法を模索している取り組みについて、説明を受けた。

3月22日には、本センターの寄付元であるスルタン・カーブース文化科学高等センターの研究計画部部長であるムハンマド・シーザーニー氏と会い、東京大学中東地域研究センターの成果等を報告し、今後の活動計画などについて話し合った。

上記のような多忙な関係各所訪問の合間に、オマーンの文化・自然環境利用実態にかんする調査もマスカト市内および近郊ニズワにて行った。今回のオマーン滞在中にとくに注目して調査したのは、「ファラジュ」と呼ばれる伝統的な水利施設である。山地に降雨し、地中にしみ込んだ水を、地下水道を使って、町とナツメヤシ園に引き入れているのである。類似の施設は、イランやアフガニスタン、中央アジアにもみられ、それらの地域では、カナート、カーリーズと呼ばれている。中東地域における文化の類似性・関係性を強く感じさせられる貴重な水利施設を直接見ることができて感激した。なおオマーンのファラジュはユネスコの世界遺産にも登録されており、オマーンを代表する文化遺産であると同時に、古くから人々の生活を支え、農業生産の基盤となってきたものである。石油資源を用いて近代化を進める一方、こうした伝統的な水利施設も大切に保存し、現在でも活用しているオマーンの取り組みは注目に値する。このほかにも、オマーンがアラブ地域であると同時にインド洋交易とも深くかかわり、そのことが現在のオマーンの独特の立ち位置を形成していることを、身をもって経験する機会にも恵まれたことも記しておきたい。

本出張は、日本オマーン協会の大森敬治理事長の熱心な協力をもとに実現したものである。とくにスルタン・カーブース大学学長との会談と公文書館訪問にかんしては、協会の尽力がなければ実現しなかった。記して謝意を表したい。

バフワーン氏との面会

ビーマーニー学長および日本オマーン協会の大森理事長と

オマーン国立公文書館のダウヤーニー館長と

ニズワのファラジュ

スルタン・カーブース大学における会議

スルタン・カーブース大学の時計台

スルタン・カーブース文化科学高等センター研究計画部シーザーニー部長と

ファラジュ記念碑

4. 書籍案内

三代川寛子 編著
『東方キリスト教諸教会―研究案内と基礎データ』
2017年、明石書店。

本書は、上智大学イスラーム地域研究機構で受託した、文科省による「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」の拠点強化事業「イスラームをめぐる諸宗教間の関係の歴史と現状」（2011～2012年度）で刊行した『東方キリスト教諸教会―基礎データと研究案内』SOIAS Research Paper Series No. 8および『東方キリスト教諸教会―基礎データと研究案内（増補版）』SOIAS Research Paper Series No. 9を基にしている。

当初はプロジェクト刊行物として出版されたものであるが、内容を鑑みて商業出版を目指すも、本書が実際に世に出るまで5年もの月日がかかってしまった。その間、徐々に執筆陣を増やし、さらに記事や地図、索引を追加したところ、気づけば608頁の大著に育っていた。執筆を快諾してくださり、度重なる編集作業にもご協力いただいた執筆陣の皆さまおよびインドの章の翻訳を引き受けて下さった酒井麻里奈さんには、この場を借りて厚くお礼

を申し上げたい。また、最初に本書に関心を寄せて下さった明石書店の小林洋幸氏、そして編集中に病を得られ、本書の刊行を見ずして他界された小林氏の後を引き継ぎ、なかなか進まない編集作業に辛抱強くお付き合い下さった佐藤和久氏にも深く感謝を捧げたい。

本書は、翻訳書を除けば、日本語による東方キリスト教諸教会に関する最初の概説書であろう。東方キリスト教諸教会とは、オリエンタル・オーソドックスと呼ばれる非カルケドン派（コプト正教会、シリア正教会、アルメニア使徒教会、エチオピア正教会、マランカラ正統教会など）と、いわゆるネストリオス派に起源を持つアッシリア東方教会を含む教会群を指す語とされている。本書ではそれに加えて、中東地域に拠点を持つギリシア正教会および東方典礼カトリック教会などを扱った。また、本文は、ナイル川流域、レヴァント、メソポタミア、アルメニア、アナトリア、インド、マグリブ・イベリア半島と地域ごとに7部に分かれており、教会ごとに全20章と3本のコラムから成る。執筆陣の専門は幅広く、古代ローマ史からビザンツ史、イスラーム史、西洋中世史、中東の近現代史、キリスト教学、宗教学、人類学、音楽学、建築学などにおよぶ。本書はすべて日本人あるいは日本に拠点を持つ研究者らによる書下ろしである。

本書は、副題が「研究案内と基礎データ」であることからわかるように、単に上記の教会群の概説だけではなく、現在日本で行われているこれらの教会に関する研究を紹介する意図を持って編集された。そのため、本書は概説や通史に相当する部分と、各執筆者が取り組んでいる研究の内容を扱っている部分とで構成されている。さらに、研究案内、研究動向、コラムなどで研究関連の情報を補った。これは、元来が研究プロジェクトの刊行物であり、読者層として大学院生かそれ以上の研究者を想定していたことに由来している。

そのため本書は、いわゆる平易な入門書ではなく、一般の読者の立場からしたら少しとっつきにくい部分があるかもしれない。この点は、商業出版するにあたって考慮すべきであったかもしれないが、編者としては、「専門的すぎる」という理由で、これらの教会に関する貴重な情報を伝える原稿を一部でも割愛する気にはなれなかった。むしろ、一般向けの書籍と専門書の間を繋ぐ立ち位置の書籍があってもよいのではないかと思い、研究者向けの情報を掲載するという方針は変更しなかった。

また、本書は、宗教的実践者あるいは教会は違えど同じキリスト者として東方キリスト教諸教会に関心を持つ読者の立場からみても、物足りないものかもしれない。本書では、神学や典礼に関する事柄はあまり取り上げられていないし、各章が教会ごとに構成されているため、エキュメニズムや教会間の関係史についても、あまり紙幅を割かれていないからである。

さらに、これらの教会や宗派の「正しい名前」を知りたい読者も、困惑するかもしれない。本書では、「ヤコブ派」（シリア正教）、「単性論派」（非カルケドン派）など、一般に使用されているが要検討と思われる名前については、できるだけ説明を付して代わりとなる表現を提示した。しかし、時代や地域によっては要検討とされた呼び名の方がむしろ適切な場合もあり、また、代わりになる適切な表現が見つからなかった場合もあるなど、呼び名を検討する作業は一筋縄ではいかなかった。そのような事情もあり、本書の全体を通して必ずしも用語が統一されているわけではないし、編者の立場として、本書で使用された表現のみが「正しい名前」であると主張するつもりもない。

ともあれ、日本語による東方キリスト教諸教会に関する研究はまだ緒に就いたばかりであり、その中で、たどたどしい歩みであったとしても、まずは一歩踏み出すことができたのは多くの方々のご助言・ご助力によるものである。特に、東京大学大学院総合文化研究科、スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座の高橋英海先生には多くの原稿を執筆していただいたのみならず、論集全体の内容に関しても様々なご助言をいただいた。改めて、厚く御礼申し上げたい。

（執筆・三代川寛子）

●UTCMESスタッフ紹介　（平成30年3月31日現在）

〈スタッフ〉

高橋　英海（センター長、兼務教授）
森元　誠二（客員教授）
辻上　奈美江（特任准教授）
倉澤　理（バフワーン文庫・特任研究員）
長澤　榮治（副センター長、兼務教授）
杉田　英明（兼務教授）
阿部　尚史（特任助教）
瀬口　美加（事務補佐員）

〈UTCMES運営委員〉

高橋　英海（委員長、大学院総合文化研究科教授）
長澤　榮治（東洋文化研究所教授）
高橋　哲哉（大学院総合文化研究科教授）
菊地　達也（大学院人文社会系研究科准教授）
羽田　正（理事・副学長、東洋文化研究所教授）
矢口　祐人（大学院総合文化研究科教授）
杉田　英明（大学院総合文化研究科教授）

〈スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座運営委員〉

高橋　英海（委員長）
西崎　文子（大学院総合文化研究科教授、グローバル地域研究機構長）
矢口　祐人
高橋　哲哉
松尾　基之（大学院総合文化研究科教授）
杉田　英明

●発行者情報　UTCMESニューズレター VOL.12　平成30年3月31日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター（スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座）
〒153-8902　東京都目黒区駒場3-8-1　TEL：03-5465-7724　FAX：03-5454-6441
http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/

印刷：JTB印刷株式会社
〒140-0004　東京都品川区南品川5-2-10　TEL：03-5715-0900　FAX：03-5715-0909